

「島のしくみ」 レポート

工学部化学生命工学科 1 年
2515300127 金子 美穂

私は今回集中講義で初めて与論島を訪れた。正直、講義をとろうと思うまでは与論島の場所も名前も知らない状況であった。地図で調べると、沖縄の島じゃないのかと疑うほど鹿児島から遠く、フェリーでの移動もきつそうだなと思った。20 時間フェリーに揺られ、与論島を訪問し、行政・観光・農業・漁業・文化について学び、さらに島の人達との何気ない交流を通して島の現状がみえた。私は観光と農業の 2 点について、島の活性化のための私なりの提案を行いたい。

1 点目に観光についてである。与論島と言えばやはりエメラルドグリーン海と白砂浜だ。海底の深さと太陽の当たり具合で色が変わる海は圧巻で、海を眺めるたびに感動を覚えた。海ガメや熱帯魚、サンゴも見ることができた。しかし今回は春先の訪問であり、島にはマリンスポーツや海水浴等を楽しむ人の姿は見えず、古くなった観光施設が目立つ状況であった。そこで今回、夏はもちろん、暖かい気候を活かした春・秋でもできる観光として、島の周囲が 23km、面積が 20 km²という小さめの大きさを活かし、漁業体験、史跡散策、60 近く存在する海岸巡り、月によれば島独特の祭りも交えた、島の自然と歴史に触れる電動自転車でのサイクリングツアーを提案する。これは与論島の大きさであるからこそ 1~2 日で可能なことであると考え。資料によると島に来る人々のほとんどは自然体験や癒し/憩い体験を目的としている。このサイクリングツアーならば気軽にこれらの体験ができ、自転車移動であるために島の曲がりくねった道やサトウキビ畑、島でしか味わえない景色や音、匂いを感じられ、環境にも優しく、また疲れた時にふらっとお店によれたりして、そこで出会う島の人々との交流も可能であると考え。実際に講義では海に入る機会はなかったが島を十分に楽しめた。さらに、古くなった施設を活かすために、夜のイベントとして、期間限定で廃墟となったホテルを利用した肝試しを提案する。期間限定という言葉に若者は弱いので、マリンレジャー以外での若者の取り込みが期待できると思う。また、夜に行くためにふと空を見上げた時の星空の美しさを味わってもらうことも狙いである。

しかし、やはり島への交通の不便さが問題点としてあがる。これについては沖縄や奄美の他の島々との連携したツアーを組み、できるだけ格安にすることが一番であると思う。ツアーを行うためには TV や SNS での PR 活動も欠かせない。某テレビ局が行っている島への移住者をテレビで取り上げる番組を与論島バージョンで行ったら与論島の PR につながると思う。

2 点目に農業についてである。農業の中でも今回は島で盛んになりつつある畜産についての提案を行う。島での肉用牛飼育として私がよく知っているのは長崎県の壱岐で行われているブランド牛「壱岐牛」の飼育である。そこで、膨大なお金がかかる非常に難しい提案であると思うが「ゆんぬ牛(仮)」といったブランド牛を作ることを提案する。子牛の状況で

売り出す現在の状況に加え、島ならではの食材、南国のサトウキビ等を用いた飼料を与えて肥育し、島の肉牛として売りに出すのもいいのではないかと思った。一度ブランド牛化できれば、島の特産品として与論の PR となって全国から目を向けられるようになり、マリンスポーツ以外での食での観光客の誘致にもつながると思う。しかしブランド牛化だけでなく子牛の飼育には長い期間が必要である。そこであがるのが後継者不足である。これについて、農業高校・大学に移住の募集をかけることを提案する。後継者不足の解決だけでなく、専門的なことを学んだからこそその牛の改良や研究、また島外出身であるからこそ普通では思いつかない新しい視点を取り入れた島独自の製品の開発ができるのではないかと考える。専門学校系からの移住者誘致は他の農業・漁業での後継者不足の解決にも活きると思う。

以上の 2 点で私なりの提案を行った。たったの数日間の滞在からこのような提案を行うため、至らない点が多くあると思う。しかし、その数日間でも与論島を周ることができ、自然や島の人へのあたたかさに触れられてよかった。なんとなくで取った講義であったが与論を知り、また他学部学科の学生との交流もでき、とてもいい機会だった。またぜひ訪れたい。

島のみなさん、貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。